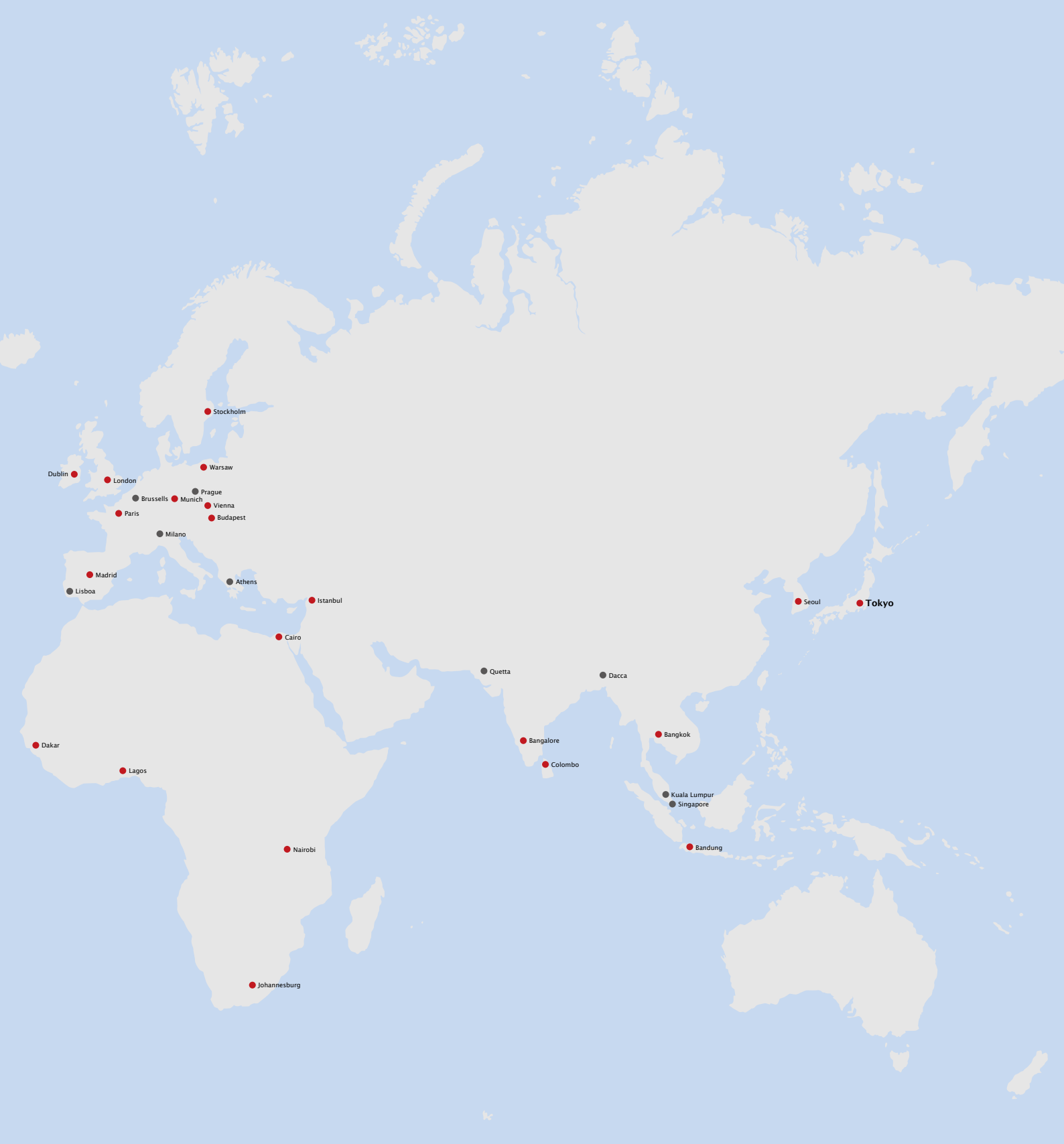


ASHOKA JAPAN

innovators for the public

Progress Report III September 2014 - November 2016



What's Ashoka?

Ashoka is a global network of systemic change-makers that aims at altruistic goals in ninety countries.

アショカは 90 カ国で公益のためのシステミック・チェンジに取り組む
チェンジメーカーのグローバル・ネットワークです。

「社会システムを根底から変えるアイデアを生み出した人々を支える仕組み」。アショカ創設者のビル・ドレイトン (Bill Drayton) が 10 代の頃から抱いてきたこの構想は、アショカ創設時の 1980 年代には馴染みのないものでした。1980 年、彼の描いた社会イノベーターの基準に適う社会変革者、グロリア・デスーザをインドで発見し「アショカ・フェロー」第一号として認証しました。

フェロー発掘とともにフェローの活動母体「ASHOKA Innovators for the Public (アショカ：公益のための刷新者の集団)」を米国ワシントン D.C. に発足させました。この母体により、アショカ・フェローのネットワークが形成され、アショカの目指す社会変革は「大陸単位での社会問題の解決」であるという認知と必要性が次第に理解されるようになりました。

設立 4 年後には 36 人をフェローとして認定し、財政支援のほか孤軍奮闘する彼らを政治的な危険から守り、ネットワークを拡大していきました。2016 年 10 月現在、約 3300 人のアショカ・フェローが 89 カ国で活動し、システムチェンジによる根本的な社会変革を推進しています。

アショカ・フェローのネットワークが 80 カ国に広がり、フェローの数が 2500 人を超えた 2009 年前後から、アショカ内で議論を深め新しい方向づけが打ち出されました。

そして、これまでのフェロー発掘活動とは別に、「Everyone-A-Changemaker」の標語のもと、全てのひとがチェンジメーカーになる世界を目指すため、若者を対象とした取り組みの展開が始まりました。子供たちが新しい時代のリーダーとして育つ環境創りが、もう一本の支柱として加わったのです。具体的には、小中高校を対象とする Changemaker School (チェンジメーカースクール)、大学を対象とする Ashoka U Changemaker Campus (アショカユー・チェンジメーカーキャンパス)、そして 12 才～ 20 才の個人を対象とする Youth Venture (ユースベンチャー) の 3 つの取り組みです。

Message from Ashoka Japan

Entering the second phase after start-up period

これからの歩み

海に囲まれ、外からの直接的な影響や刺激から遠い日本。言語的にも孤立し、翻訳された情報では骨に沁みるほど届くことは難しいといえます。そして細部への注意が研ぎすまされ、同質の人々の僅かな違いや息遣いにすぐさま反応する国民性は、きめの細かさや繊細さが隔々に行き渡る独特の文化を生みだしてきました。

1 分も遅れずに到着するバスや電車。サービス業に携わる人々の微に入り細に入る対応。美しくデザインされ清潔に維持されている公共施設。これらは、世界中どこにもない日本が誇る優越性といえるでしょう。

一方、それらの美点を創りだしている人への配慮は置き去りにされています。ジャーナリストは、真実を伝えるという使命を貫けず、彼らの居場所はなくなっているようにもみえます。企業や政府で決定権を持つ女性の割合は、145 カ国中 111 位。女性が楽しく子育てをしながら、それぞれの能力を活かした仕事に誇りをもち、いきいきと生活する環境は整っていないのが現状です。

テクノロジーの急速な発達がコミュニケーションの方法や質の変化を促し、その結果、行動パターンや価値観は変容しています。それでも多くの人がその変化に気づかず伝統的な社会通念に固執し、そこからはみ出した人々は行き場を失っている。1970 年代までは、社会を変えようと願う普通の市民に出来ることは、デモかストライキに参加するか教会などでの慈善活動でした。そんな時代にシステミック・チェンジという新たな概念が生まれました。1980 年インドで始まり世界各国に広がっているシステミック・チェンジメーカーの発掘が、日本でも始まっています。数百万人にひとりという変革者を見つけるのはどこでも難しいのですが、とりわけ日本では難航しています。他方、日本人フェローたちは認証からほどなく、彼らの取り組みがグローバルなインパクトを生み出すまでになっているのは驚くべきことです。完璧を求める日本の厳しさが高レベルのイノベーターを生み出しているのでしょうか。

失敗に厳しい日本では、若者も萎縮しがちです。その日本で、私たちは「内省力、エンパシー、リスクをとる勇氣、躓いたら立ち上がって前進する力 (レジリエンス)」といった、21 世紀型リーダーの資質を備えた若者が生まれやすい環境創りに携わってきました。クリエイティブで勇氣のある人にとって「躓きは成長の糧であり、本当の敵は躓くことを恐れること」という信念を貫き、「失敗」は意に介さない。絶海の孤島のような未だ矮小なこのコミュニティは、私たちが目指す理想の社会のミニチュア版です。

日本での活動を始めこの 5 年間に得た最大の学びは、環境さえ整えば多くの若者チェンジメーカーが驚くほどの速さで生まれ、世の中を変えて行くという「予感」が「確信」に変わったことです。全ての人たちにチェンジメーカーのカルチャーが浸透する世界を目指して、私たちは 2017 年次の一歩を踏み出しました。



渡邊 奈々
アショカ・ジャパン 創設者・代表理事
アショカ・グローバルリーダーシップ・メンバー

Nana Watanabe
Founder and Chairperson Ashoka Japan
Global Leadership Group Member

Contents

02	アショカとは？	What's Ashoka?
03	アショカ・ジャパンからメッセージ	Message from Ashoka Japan
04	目次&キーワード	Table of Contents & Ashoka Glossary
05	拡大するアショカの取り組み	Ashoka's Expanding Community
06	アショカ・ジャパンの活動	Ashoka Japan's events 9/2014 - 10/2016

Ashoka Fellow

08	アショカ・フェロー	Ashoka Fellow
10	海外フェローの講演	Global Ashoka Fellows' Talks in Japan

Youth Years

12	チェンジメーカー・スクール	Changemaker School
13	アショカユウ	Ashoka U Changemaker Campus
14	ユースベンチャー	Youth Venture
16	ユースベンチャー紹介	Youth Venturers

Walls No More | Walls No More

18	ウォールズ・ノーモア 共創
----	-----------------

20	アショカの歴史	History 1970's - 2010's
21	ビル・ドレイトンからメッセージ	Message from Bill Drayton
22	ニュース & 参加方法	News & Join Ashoka!
23	パートナーなど	Partners, Allies, Friends, Staff

ASHOKA Glossary アショカを知るためのキーワード

■ Social entrepreneurship

ソーシャル・アントレプレナーシップ

■ Social entrepreneur

ソーシャル・アントレプレナー

1970 代にアショカ創設者ビル・ドレイトンが social work (ソーシャルワーク= 社会貢献事業) と business entrepreneurship (ビジネス起業) という対極を組み合わせて創った概念であり、その呼称。

もともとの「ソーシャル・アントレプレナー」の定義は、「社会にある綻びを生み出している根本的な原因を探り、作用していない仕組みに替わる新しい仕組みを創り出し推進する個人」。その仕組みは特別な才能やネットワークなどがなくても模倣が可能であることが必須だ。ソーシャル・アントレプレナーが最も重要視するのはインパクト(恩恵を受ける人口)である。このオリジナルの定義とは別に 150 を超える定義が世界中で使われている。

■ Systemic change

システミック・チェンジ

■ Systemic changemaker

システミック・チェンジメーカー

1970 年代までは、社会を変えたいと願う普通の市民ができることは、ストライキ、デモ、または従来の慈善事業しかなかった。そんな状況のなかでシステミック・チェンジという新しい概念が生まれた。応急措置的な症状の緩和ではなく、症状を生み出している根本的な原因を探り、新しい仕組み(システム)を生み出す個人を「システミック・チェンジメーカー」と定義し、アショカ・フェローとして認証している。人権、教育、環境、経済発展などの領域で活動するアショカ・フェローは、2016 年末時点で 89 カ国約 3300 人。毎年 200 人の発掘を目指している。アショカ・フェロー(システミック・チェンジメーカー)の基準については P8 を参照。

■ Empathy

エンパシー

アショカは、エンパシーを 21 世紀リーダーに不可欠な能力として位置づけている。エンパシーという英語の言葉の解釈は 100 人 100 様であるが、心の教育の第一人者である Roots of Empathy ルーツ・オブ・エンパシー創設者メリー・ゴードン氏の定義と「The whole New Mind ハイコンセプト」著者ダニエル・ピンク氏の定義が、アショカの定義に最も近い。「自分の肺を他者の肺に(想像力で)重ね、その人の吸う空気を自分も感じられる能力」(ゴードン氏)。「自分を他者の立場に置き、その人の気持ちを推し量る能力。いま、始まっている新しい時代で生き抜くには、知性とエンパシーが二つの支柱となるだろう」(ピンク氏)。正確な日本語訳が見つからないために「エンパシー」を日本でも使っている。

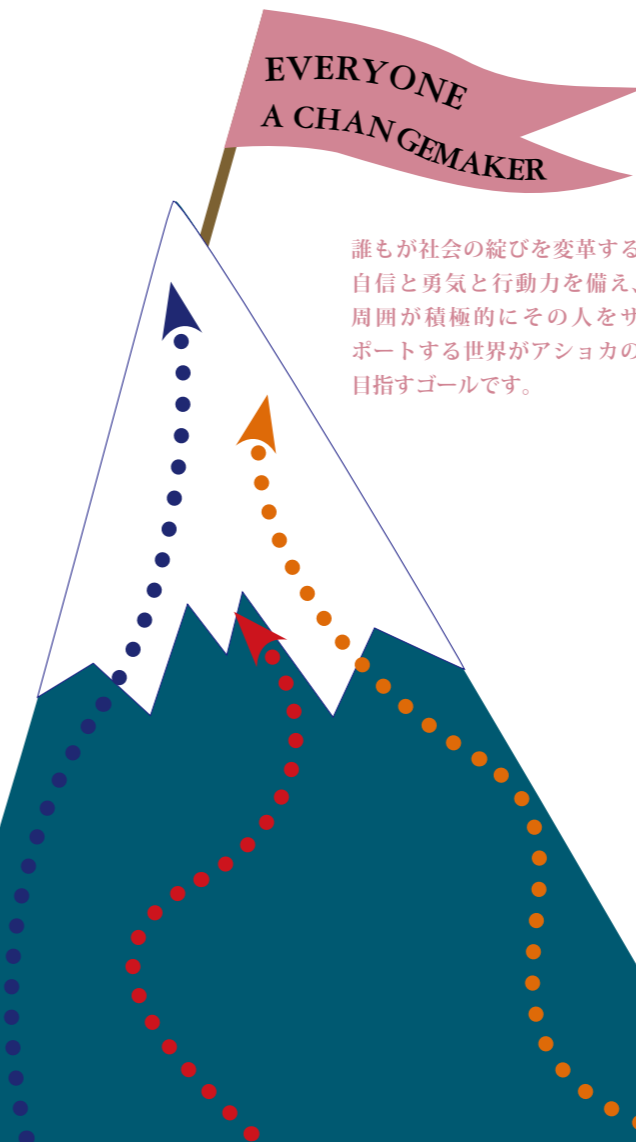
Ashoka's Expanding Community

システミック・チェンジメーカーの発掘に「若者の教育」という新しい支柱が加わりました。
social entrepreneurs to change the schools that nurture future leaders

アショカは 1980 年以来、システミック・チェンジメーカーを発掘し「アショカ・フェロー」として認証し、かれらの活動がさらに加速化するためのネットワークを強化してきました。この取り組みが始まって 30 年ほど経った頃から、アショカ内でそれからの方向付けの議論が交わされるようになり、その結果、創立以来のフェロー発掘活動とは別に、21 世紀型リーダーを育てる教育に関わる取り組みがスタートしました。子供たちが新しい時代のリーダーとして育つための仕組みとしてのア

ショカの新しい支柱は、
①小中高校を対象とする Changemaker School チェンジメーカースクール
②大学を対象とする Ashoka U Changemaker Campus アショカユウ・チェンジメーカーキャンパス、そして
③12 才～20 才の個人を対象とする Youth Venture ユースベンチャーの三つの取り組みから成り立っています。

Everyone A Changemaker の目標に向けて ASHOKA が取り組んでいる活動



Ashoka Fellow

アショカユウ・フェロー

1980 年代開始。
機能していない社会システムに対し斬新な解決法を提案し、そのアイデアが実際に効果を生むまで粘り強く取り組むソーシャル・アントレプレナーの発掘。

Youth Years

ユース・イヤーズ

Ashoka U (アショカユウ)

2005 年開始。
「より良い世界を築く」チェンジメーカーの孵卵器としての大学のミッションを自認する大学のネットワーク。2016 年 4 月現在 8 カ国 37 大学がネットワークにあり、22 校がスクリーニング中。

Youth Venture (ユースベンチャー)

2000 年開始。
おもしろいことから目を離さず、解決策を生み出し行動する若者(12-20 歳)に 1 年間の実験の環境を与える。日本では 2012 年に本格的にスタート。

Changemaker School (チェンジメーカースクール)

2010 年開始。
「エンパシー」と「おもしろいと感じたら自分が変える」能力の醸成に重きをおく小中高校を見つけ出しグローバルなネットワークを創る取り組み。
2016 年末時点で、28 カ国 198 校のネットワーク。
数年の内に 600 校を目指す。

Walls No More/Co-Creation

ウォールズノーモア / コウクリエーション

企業が社会の問題を生み出す存在から「社会の問題を解決する存在」へ進化するための枠組み作り。
従来の CSR を超える企業全体のカルチャーと目的を共通する試み。

アショカ・ジャパンの活動

September 2014 - October 2016

アショカ・ジャパンは全ての人がチェンジメーカーになる世界を目指して前進を続けます。

Ashoka Japan continues its effort to approach 'Everyone A Changemaker' world.

2014



Sep.14
2014年度アショカ・ジャパン フェローとして曾根原久司が選出される
Ashoka selects Hisashi Sonehara as the fifth Ashoka Fellow from Japan.



Oct. 4
第13回ユースベンチャーパネル審査会 (兵庫県神戸市)
The 13th Youth Venture Presentation Panel in Kobe, Hyogo Pref..



Nov.23
第14回ユースベンチャーパネル審査会 (宮城県仙台市)
The 14th Youth Venture Presentation Panel in Sendai, Miyagi Pref..



Nov.28
アショカ x ベン&ジェリーコンペ「Join Our Core」審査会開催 (東京)
Ashoka and Ben&Jerry's Ice Cream joint competition to select young social entrepreneurs.

2016



Jan.20
アショカUネットワーク校アトランティック大学学長講演会 (東京)
Darron Collins, the College of the Atlantic President, gives presentation in Tokyo.



Feb.21
第21回ユースベンチャーパネル審査会 (岩手県宮古市)
The 21st Youth Venture Presentation Panel in Miyako, Iwate Pref..



Mar.19
第6回ユースベンチャー大集会 We are the Change および第22回ユースベンチャーパネル審査会 (東京)
The 6th We are the Change and the 22nd Youth Venture Presentation Panel in Tokyo.



Apr.20
第10回アショカ・フェロー・スピーカーシリーズ (東京)
The 10th Ashoka Fellow Speaker Series in Tokyo / Takashi Kawazoe, CarePro Founder&CEO
Speaker: 川添高志 (2013年選出フェロー/日本)

2015



Nov.29
第8回アショカ・フェロー・スピーカーシリーズ (東京)
Speaker: ジム・トンプソン Jim Thompson (2004年選出フェロー/アメリカ)



Mar.22
第15回ユースベンチャーパネル審査会 (岩手県釜石市)
The 15th Youth Venture Presentation Panel in Kamaishi, Iwate Pref..



Mar.28
第4回ユースベンチャー大集会 We are the change および第16回ユースベンチャーパネル審査会 (東京)
The 4th We are the Change and the 16th Youth Venture Presentation Panel in Tokyo



Apr.
「アショカ・フレンズ東アジア Ashoka Friends East Asia」スタート



May.14
第23回ユースベンチャーパネル審査会 (岩手県釜石市)
The 23rd Youth Venture presentation Panel in Kamaishi, Iwate Pref..



Jun.1 - 5
チェンジメーカー X チェンジ ChangemakerXchange 開催 (島根県津和野)
ChangemakerXchange event in Tsunashima, Shimane Pref.



Jul.8 - 17
チェンジメーカーキャンパス開設に向け夏期プログラムを実施 (広島県大崎上島)
Summer program implementation for the Changemaker Campus opening in Oshima, Hiroshima Pref.



Jul.11
第11回アショカ・フェロー・スピーカーシリーズ
The 11th Ashoka Fellow Speaker Series in Tokyo/David Green, Project Impact, Founder&CEO
Speaker: デヴィッド・グリーン /2001年選出フェロー/USA



June.20
第17回ユースベンチャーパネル審査会 (宮城県仙台市)
The 17th Youth Venture Presentation Panel in Sendai, Miyagi Pref..



Jul.10
2014年より、ANA が推進する「Blue Wing」プログラム 2年目をスタート
Collaboration with ANA・Blue Wing renewed for the second year.



Aug.22
第18回ユースベンチャーパネル審査会 (岩手県釜石市)
The 18th Youth Venture Presentation Panel in Kamaishi, Iwate Pref..



Sep.26
第5回ユースベンチャー大集会 We are the Change および第19回ユースベンチャーパネル審査会 (東京)
The 5th We are the Change and the 19th Youth Venture Presentation Panel in Tokyo.



Sep.24
第7回ユースベンチャー大集会 We are the Change および第24回ユースベンチャーパネル審査会 (東京)
The 7th We are the Change and the 24th Youth Venture Presentation Panel in Tokyo.



Oct.15
ジェリー・ホワイト (アショカ上級フェロー / ノーベル平和賞受賞者) が、広島県立大学で講演。
Jerry White, Ashoka Senior Fellow and Nobel Peace Laureate, gave a talk at Hiroshima Pref. University.



Oct.29
第25回ユースベンチャーパネル審査会 (宮城県気仙沼市)
The 25th Youth Venture Presentation panel in Kesennuma, Miyagi Pref..



Oct.30
2015年度アショカ・ジャパン フェローとして岩元美智彦が選出される
Ashoka selects Michihiko Iwamoto as the fifth Ashoka Fellow from Japan.



Nov.1
第20回ユースベンチャーパネル審査会 (兵庫県神戸市)
The 20th Youth Venture Presentation Panel in Kobe, Hyogo Pref..



Dec.10
第9回アショカ・フェロー・スピーカーシリーズ (東京)
Speaker: サシャ・ハゼルマイヤー Sascha Haselmayer (2011年選出フェロー/デンマーク)



2016年6月、30才以下のソーシャル・イノベーター 19人が、ドイツ、ベトナム、マレーシアなど8カ国から島根県津和野町に集合しました。
これまでヨーロッパ各地で10回開催された若者イノベーター合宿「チェンジメーカーエクステンジ (ChangemakerXchange)」のアジアで初めての試みに参加するためです。世界中から寄せられた申し込みの中から厳選された19人は、地方創生の取り組みが実際に行われている津和野町で、4日間の高密度の意見交換を展開しました。その後、広島を訪れ、6人のユースベンチャーが国内各地から合流しました。
チェンジメーカーエクステンジは、独ボッシュ財団 (Robert Bosch Stiftung) とアショカの協働プログラムです。

Ashoka Fellow

アショカ・フェローとは？

世界最大の公益のためのイノベーターの集団であるアショカの基準に沿って認証を得たソーシャル・アントレプレナー（social entrepreneur）の名称です。

Ashoka Fellows are social entrepreneurs whom Ashoka recognizes as individuals who have innovative solutions to social problems and the potential to change patterns across society.

1980年の創設から2016年の36年間に、89国で約3300人のフェローが選出されています。一年に200人の選出を目指して発掘に取り組んでいます。

アショカ・フェローは、「目に見える不具合を生み出している根本的な社会の欠陥を是正する真新しい仕組み」を考案し、創り上げ、模倣されることで拡散させる能力を持つ個人です。表現を変えれば、これまでの「思い込み」という壁を崩し、「当たり前」を破壊し、新しい構造とルールを社会に浸透させる変革者とも呼べます。3300人の中でもトップ1～2%の

アショカ・フェローは、数百万人から数億人へ影響を及ぼす変革を成し遂げています。

アショカ・フェローの83%は、(選出から10年以内に)国の政策の変更を促すまでの影響を及ぼし、それぞれの分野の第一人者として活躍しています。また、91%の取り組みが、政府や他の団体に模倣されることによって、変革が拡大しています。一方、(3年間の生活費給付を受けたフェローのうち)85%が5年以内に独立し、本人の生活も取り組みの運営も、財政的に成り立つまでに成長しています。

アショカ・フェローとは、「当たり前」とされる思い込みを覆し真新しい基準を創る人です。

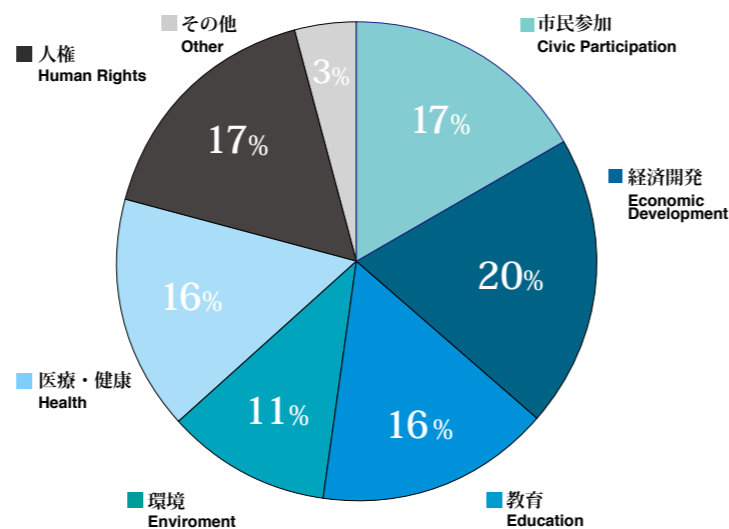


日本上級フェロー片山ます江は、「特別養護施設(特養)の質は低くて当たり前」というメンタルモデルを覆した。次は、高齢者デイケアセンターの新しい基準を創るべく米ポートランドでThe Encorepreneur Cafeを2017年スタートさせる。(写真)片山の頭に描いた特養モデルが2013年に川崎市幸区にオープンした。



米国フェロー・ジム・トンプソンは、「試合に勝つ」と同時に「人間的に成長する」二つのゴールを充たす若者スポーツコーチ法PCAを開発し、スポーツコーチの新しい基準を定着させた。PCAコーチ法で訓練を受けた学生は、これまでに860万人。2017年春、日本への導入をスタートする。

アショカ・フェローが活動する分野
The sectors Ashoka Fellows are engaged



アショカ・フェローの選考について Selection of Ashoka Fellows

アショカの面接官は、フェロー候補者の発想やアプローチや取り組み、そして人となりを知りたいために、これまで36年間に、精査を繰り返して、磨かれた選考方法を通じて候補者と向き合います。

Ashoka helps maximize social impact through a rigorous Fellow selection process that has been refined over 36 years. Candidates, through the interviews, are expected to communicate their ideas, scrutinize their methods, and reflect on themselves as individuals.

選考基準 Criteria for Selection

- Imminence of the Issue**
喫緊で切迫した社会の問題に対する解決軽減のアイデアである。
- Replicability of the Approach**
特別な才能やネットワークなどに頼らず、模倣できる仕組みである。
- Social impact of the idea**
特定の文化や環境を越えて、インパクトを及ぼす可能性を含むアイデアである。
- New Idea**
これまでに存在しない全く新しいアイデアであり、アプローチである。
- Entrepreneurial Quality of the Person**
アイデアを実現し、インパクトを出すまで全身全霊で打ち込むというアントレプレナーとしての気質が隅々までいきわたっている。
- Ethical Fiber of the Person**
真摯さ、誠実さ、倫理性を備えた人となりである。

Ashoka Fellows from Japan 日本人のアショカ・フェロー

アショカ・ジャパン発足以来、5人のソーシャル・アントレプレナーがネットワークに加わりました。
Five Ashoka Fellows were selected from Japan between 2011 and 2016.



2015年度選出
岩元 美智彦
Michihiko Iwamoto | Selected 2015
日本環境設計株式会社創設者+CEO
http://www.jeplan.co.jp/
JEPLAN Founder+CEO

1964年鹿児島生まれ。大学卒業後、繊維商社にて営業職を経験。取引の傍らで廃棄される製品のリサイクルが日本の課題であると感じ、企業内で再生繊維の開発・普及・啓発に5年間、繊維製品のリサイクルのビジネスモデル構築に7年間携わる。2007年1月日本環境設計株式会社を設立、代表取締役社長に就任。繊維製品だけではなく全ての使用済み製品の資源循環と地球環境への貢献を目指して、奮闘中。Creating Total Recycling Culture through implementing the newest technology combined with nurturing consumer-participating mindset.

「包括的リサイクル文化 (Total Recycling Culture)」という理想を実現するシステムの具体的な構築が高く評価され、岩元美智彦のフェロー認証が決定。この文化は二つの柱から成る。一つの柱は、「綿やあらゆる種類のプラスチックを含む全ての物を油に変える」というもの。理論的には存在していたテクノロジーを実験し成功させ「あらゆる物が石油になる」具体的な解決法を創ったこと。2016年には北九州に自社リサイクル工場を建設予定。もう一つの柱は、これまで「ゴミ」と見なされていたものを「エネルギーを生み出す資源」と再定義する消費者の意識改革です。不要な携帯電話を宅急便で回収するなど消費者が参加しやすい方法を提案し、消費者の意識を変化させている。

2016年秋の時点で、無印良品、イトーヨーカ堂、イオン、スターバックス、H&Mなど180もの企業と提携し、使わなくなった衣服や日用品の回収を行っている。さらに、140を超える幼稚園と提携し、子供たちに古いプラスチックの玩具やペンなどが、石油を争って起こる戦争を食い止めることができることを説き、リサイクルという行為で子供たちがチェンジメーカーになれる意識を育成している。



2014年度選出フェロー
曾根原 久司
Hisashi Sonehara | Selected 2014
NPO法人 えがおつなげて 代表理事
http://www.npo-egao.net

政府系金融機関のコンサルタントとして、バブル経済の崩壊を経験。これを契機に新しい経済活性化のあり方を求め、1995年、東京から山梨県の農村へ移住。耕作放棄地の再生を独力で始める。2001年に「NPO法人 えがおつなげて」を設立し、都市と農村の交流を進め、企業向け従業員研修プラムとして、農業・農村での人材研修、企業ファームを開発。都市のニーズと農村資源をつなげる経済活性化の手法を開発。

Connecting abandoned farmlands and disoriented young adults in urban areas to create a win-win scheme to respond to the crisis in Japan.



2013年度選出フェロー
川添 高志
Takashi Kawazoe | Selected 2013
ケアプロ株式会社 代表取締役
http://carepro.co.jp

P.11をご参照ください。



2012年度選出フェロー
片山 ます江
Masue Katayama | Selected 2012
社会福祉法人伸こう福会 専務理事
http://www.shinkoufukushikai.com

大阪府出身。日本社会の高齢者看護に対する姿勢と価値観を1980年代から変革。つきめ細やかなアプローチと価格的にも手の届きやすい快適な高齢者ホームは「伸こう会モデル」として知られ、2000年のベネッセ社への売却で一気に普及した。売却後、公営のホームの改革を進めている。2016年には新しい「デイケアセンター」のモデルとしてThe Encorepreneur Cafeを米オレゴン州ポートランドでスタートした。

Katayama has been exploring the answers to improve the lives of elderlies in Japan. Since mid-1980's. The senior home model that reflects her values has spread all over Japan since then. Her next innovation, the 21C style day care center "The Encorepreneur Cafe", has started in Portland in US in 2016.



2012年度選出フェロー
大木 洵人
Junto Ohki | Selected 2012
シェアールグループ 代表
http://shur.jp

群馬県出身。手話通訳士として「手話を入力する特別なキーボード」と「手話のオンライン辞典」の二つの要素から構成されるオンライン手話辞典Slinto (スリント)を開発。2015年には、「手話の終わり」の手形と位置からも絞り込み検索ができるように新機能が追加された。今後は、日本と香港を中心にインドやベトナムなどへのアジア展開を進めていく予定。

Junto developed Slinto, an online sign language dictionary, to look up a word or a sign while making it possible to directly translate from one language's sign to another. In 2015 Slinto added a new function of further research refinement.

Global Ashoka Fellows speak to Japanese audience

第8回スピーカーシリーズ (エンパシー・キャンペーンの一環)

2014年 11月29日 京都大学
12月1日 日本財団ビル
12月3日 (株)リクルートマーケティングパートナーズ社



ジム・トンプソンは、US News 誌の「アメリカの非営利ビジネスのマネジメントプログラム」のランキング1位を獲得した。米スタンフォード大学のPublic Management Programのディレクターを1987年から1998年まで務める。1995年には、同大学MBAコースGlobal Management Programのディレクターとして就任。同プログラム内で、グローバル時代のリーダーシップを培うコース「Learning to Lead」を開講し、共同教授に就任。また、社会人対象のStanford Continuing Studies Programで、リーダーシップとコーチングを教える他、企業リーダー対象の1対1のコーチングも行い、90年代に米国で沸き上がったリーダーシップ教育の代表者としての地位を確立した。

トンプソンは、息子の野球チームのコーチを務める中で、指導者、保護者、ひいては社会の勝利至上主義が、若者からスポーツの楽しさを奪い、スポーツが若者の人間的成長に悪影響を及ぼしていることに気づいたと言う。その気づきが、「勝つこと」と、「人間的成長を促すこと」の両方を目指す「ダブル・ゴール」コーチ法の構想に繋がった。1998年同大学体育学部内でポジティブ・コーチング・アライアンス(Positive Coaching Alliance)を設立した。

PCAコーチ法は、「勝つこと」と「人間として成長すること」のダブル・ゴールを掲げ、スポーツ心理学に基づき開発された若者チームスポーツコーチ法である。2014年までに北米約1700の学校やコースプログラムに導入され、実際に参加した学生は600万人を超え、今やアメリカの若者スポーツコーチの基準となっている。PCAコーチ法で訓練を受けたチームは、「勝つチーム」となることが、受益者がここまで増えた理由である。全米に導入する目的に向かって20000人のPCA正式トレーナーが活動のスピードを緩めない。ROOTS (Rules, Opponents, Officials, Teammates ルール、競争相手、審判、仲間) に対する尊敬をチームスポーツの基本とし、練習では、ELM (Efforts, Learning, bouncing back from Mistakes 努力、学習、ミスから立ち直る強さ) をアスリートから引き出すことを目指すコーチ法だ。北米の他スコットランドにも導入され、2016年10月現在、有志による日本への導入が検討されている。

“Positive Coaching Alliance: Building Character and Self-Esteem Through Sports,” “The Double-Goal Coach” など8冊の著書がある。

第9回スピーカーシリーズ (企業が世界を変えるキャンペーンの一環)

2015年 12月10日 政策研究大学院大学
12月11日 ロクシタンジャポソ株式会社



ドイツ人の両親の元デンマークに生まれたハゼルマイヤーは、ロンドンにある英国建築協会付属建築専門大学で建築と都市計画を学んだ後、2001年に「Interlace-Invent」を設立。バルセロナや上海などで都市における技術、社会経済、開発などの戦略に関するアドバイスを業務に従事した。2003年には都市におけるサービスのイノベーションを推進するNGO「LivingLabs Global」を共同創設。そのさらに進化したかたちとして、2011年にCitymartを設立。

世界各地の都市が抱えている課題を公開し、世界中のソリューションを提供する企業や研究機関に公募をかけ、マッチングを行うというスキームがCitymartだ。本拠地をバルセロナ(スペイン)とニューヨーク(米)に置き、市民の暮らしの質の向上を目的とし、公共サービスの費用対効果の改善。副次的な目的である新市場創造による地域経済の活性化の都市課題の革新的な解決策(ソリューション)導入を推進している。

モビリティ、経済成長、社会的包括、健康・幸福、都市経営、照明、エネルギー、文化、未来の政府像、持続的ライフスタイルなど、各都市が抱える多様な課題を解決するために、社会実験国際賞(LLGA=Living Labs Global Award)を運営、2014年までの55年間に42都市と、1200の企業をマッチングさせ、69件の課題を公開して30以上の先導事業を実現させている。このソリューションに公募し、受賞した企業の95%が中小企業という結果が出ている。世界中の中小企業がCitymartの提供する海外の都市の抱える課題のソリューション募集に応募することにより実績を作り、グローバルネットワークにアクセスする途が開けた。2015年9月からは米ニューヨーク市と2年間契約を交わし、同市のイノベーション開拓に取り組んでいる。

ハゼルマイヤーは、都市変革の先端的な存在として知られている。講演の後半はコミュニティデザイナーである山崎亮氏をゲストに迎え、Citymartの取組みや日本での導入の可能性を紹介。会場は230名を超える来場者の熱気に包まれた。



ハゼルマイヤーと同じ1973年生まれ。ランドスケープデザイナー、コミュニティデザイナー。「コミュニティデザイン」の生みの親であり地方創生のリーダーの一人。

アショカ・フェロー・スピーカーシリーズ

第10回スピーカーシリーズ (企業が世界を変えるキャンペーンの一環)

2016年 4月16日 日本財団ビル



1年以上健康診断を受けていない日本人が3600万人も存在するため、川添は東京大学病院での看護師を辞め、2007年にケアプロを創業し、2008年から、血糖値やコレステロールなどを1項目500円、駅ナカなどで5分程度で結果がわかる「セルフ健康チェック」を展開してきた。自己採血をするため、医療行為とはせず、医師がいない場所でも健康チェックができるシステムチェンジを実現した。

病院で働くという従来の看護師の仕事の限界を打ち破り、地域で起業するという新しいキャリア・パスを作りだした一方で、既存の医療システムでは解決できない生活習慣病予防と医療費抑制の課題を解決する新しいヘルスケアシステムを構築し、市民にとって予防医療を身近な存在への変えることができた。

2013年に安倍首相のもとで行われた産業競争力会議でケアプロのシステムを国策として位置付けることが提言され、2014年には日本の新しい医療制度として位置付けられることとなった。国策として取り入れられてからケアプロ以外に競合事業者は1000か所以上増え、市場を創ることに成功した。

さらに、2015年インド・バンガロールに子会社を設立した。2014年の世界保健機構(WHO)の発表によれば、インドにおける生活習慣病による死者は、総死者の60%に上ると言われている。ケアプロはインドの生活習慣病予防に貢献するため、バンガロール市で現地の医療グループと提携していく。また、超高齢化社会の日本では死者数が増え、孤独死のリスクがある人が2020年には30万人になると言われており、在宅医療の充実が国家的課題である。そこで、ケアプロでは2012年に24時間365日対応の訪問看護をスタートした。これまでベテラン看護師でなければ難しいと言われてきた訪問看護であったが、ケアプロでは新卒や若手の看護師を採用・教育し、大学と共同で「看護師教育ガイド」を開発した。ガイドは無料で全国に発信され、超高齢化社会において不足している訪問看護業界に新しい人材を呼び込んでいる。

国境を越える
インパクト

第11回スピーカーシリーズ (企業が世界を変えるキャンペーンの一環)

2016年 7月11日 日本財団ビル



2012年講演者のグリーンは、それからの4年間の飛躍的進展について語りました。医療の受益者の拡大と同時に、ソーシャルインベストメント「EYE ファンドー1」に次いで「EYE ファンドー2」も、ドイツ銀行からの出資でスタートし、社会投資の世界のパイオニアとしても活躍しています。先進国並みの医療を、BOP (Bottom of the Pyramid) 人口、つまり世界人口の90%に当たる極端に貧しい人たちに届けるスキームの開発がグリーンのごとの骨子です。まずインドをはじめとする途上国の失明の最大の原因である白内障を患う人たちに先進国並みの外科手術を先進国の2%程度の治療費で提供する仕組みを、寄付と政府に頼らずに、1992年、「社会起業」としてAuroLab(オーララブ)社を興し2015年までに恩恵を受けた人口は5000万人に及んでいます。「心の資本主義: Empathic Capitalism」を提唱し、半分が「無償」、35%が「実費の3分の2」、約18%が「実費を上回る値段」を支払う三段階の手術費用システムをつくりました。この価格設定により、オーララブが提携したインドのアラヴィンド眼科病院(4000床)は、年間2万2千ほどの手術を行う世界最大の眼科病院となりました。病院には35%~40%の利益がもたらされ、寄付に頼らない独立経営が成り立っているのは、驚きに値します。このモデルには、高収入の患者の贅沢な部屋の入院料金、症例を増やすための外科医師による無償の手術などいくつかのイノベーションによって成り立っています。このモデルを導入した眼科病院はインドの他に、ムハマド・ユニス氏がグリーンに依頼して実現した、バンガラデシュに8軒の他、ネパールやケニア、南米のエルサルバドルやガチマラ、エジプト、メキシコなどにおよんでいます。

同時にグリーンは、極貧民のための補聴器の開発に乗り出し、安価で優れた質の聴覚器の開発に向けてのサーチを1990年に始め、2003年には、最新式デジタル補聴器の生産を始めました。補聴器の価格は、国によって異なりますが、欧米と同じ質の高い製品の販売額を、その10分の1ほどにすることを実現しました。



Other speakers since 2011 2011年~2016年までのスピーカーシリーズ講演者



Youth Years

Changemaker Schools チェンジメーカーズスクール

Changemaker Schools チェンジメーカーズスクールのグローバルネットワークが広がっています！

Global Network of Changemaker Schools values two skills of 21C leaders : Empathy and Changemaking skills



米ニューヨーク市ブルックリン地区のBrooklyn New Schoolの生徒たち。当校は全米24州に77校あるチェンジメーカーズスクールの中でもベストプラクティス校のひとつとして知られる公立小学校だ。子ども一人に対して大人2人から3人が関わるきめ細やかな指導の元に「安全な場所」が生まれている。生徒の3人に1人が何らかの弱者であり、自然にエンパシーが引き出される環境が当校のカルチャーを醸成している。2016年の入学倍率は10倍を超えた。



私たちの生きる世界は、20年ほど前から想像を超えるスピードで変わりつつあります。テクノロジーの発達によってコミュニケーションが変容し、人間同士の関わり方や心の有り様にも影響し、20世紀型教育で育った人々には予測しきれない時代が始まっています。この新しい時代を牽引するリーダーに期待される能力とは何なのか、教育界や各界のリーダーたちが議論をくり返しています。その能力は20世紀型教育の基準からは、推測することは到底できないのです。

この岐路において、アショカは「エンパシー」と「チェンジメーカーズスキル」が新時代のリーダーに必要な2つの能力だと考えます。同様のビジョンを持つ教育者が牽引し、その基準に沿う教育に切り替えている学校を探し出し、2009年からグローバルなネットワークを創り始めました。この「チェンジメーカーズスクール」ネットワークには、2016年の時点で、北米、フランス、英国、インド、アフリカなどの約200校の小、中、高校が名を連ねています。3年以内に600校のネットワークの形成を目指しています。

アショカ・チェンジメーカーズスクールの最も重要視する教育の要素のひとつは、エンパシー。つまり他者の心に自分を重ねその人の感じていることを理解しようとし、立場の違う人の意見や気持ちを受け止めようとする能力です。人口の国際移動が加速化する中、日本でも、少しずつ自分とは違う文化や人種背景などの「外の人」を受け入れなくてはならない時代が始まっています。また、従来の「両親と子供が揃っているのが家族」という定義も変わりつつあります。自分とは違う家族形成を持つ同級生へのエンパシーも不可欠となります。

エンパシーに加えて、同様に重きを置くのが、「チェンジメーカーズ」の能力です。つまり、おかしいなど気づいたら、その「おかしい」ことを見つめ、どうしたら解決できるのかを自らに問い、友達を巻き込み、チームをつくり、リーダーとなって行動に踏み出すという極めて複雑で成熟度を要するスキルです。日本では、2016年からチェンジメーカーズスクールのリサーチを始めています。



28カ国のチェンジメーカーズスクール ※2016年時点

EUROPE Belgium | Denmark | France | Germany | Ireland | Poland | Netherlands | Sweden | Spain | Turkey | United Kingdom | **AFRICA** Burkina Faso | Ghana | Kenya | Mali | Nigeria | Rwanda | Senegal | South Africa | Tanzania | Uganda | **LATIN AMERICA** Argentine | Brazil | Chile | Costa Rica | Haiti | Venezuela | **ASIA** India | **NORTH AMERICA** United States |

Ashoka U Changemaker Campus アショカユ・チェンジメーカーズキャンパス



アショカユ・チェンジメーカーズキャンパスを日本で立ち上げる準備が始まりました！（写真は開催地の広島県大崎上島）

37のアショカユ・チェンジメーカーズキャンパスのひとつである、米メイン州アトランティック大学(The College of the Atlantic・COA)の協力を得て、2016年7月夏期集中合宿を行いました。この試みは、2020年までに、21/22世紀型リーダーを生み出すグローバルネットワークを持つ大学を日本でスタートするための準備プロセスです。11日間に渡るこのプログラムには、アメリカ、アイルランド、カナダなどのアショカユ・ネットワークにある大学の学生と日本の学生合わせて24人が参加しました。開催地の広島県大崎上島は、2019年に日本で初めての県立の中高グローバル校がスタートする土地でもあり、21世紀の先端的な教育の中心となりつつあります。2017年は、規模を拡大した第2回目の集中合宿を同地で開催する予定です。

アショカは、「大学を世界をより良くするイノベーターを生み出す人材育成の場にする」というビジョンを共有し、同じ船に乗り込み共に舵を切るという決意のあるリーダーが少なくとも3人いる大学を「アショカユ・チェンジメーカーズキャンパス」として認証しています。「アショカユ」は、大学の存在意義自体を定義し直す社会的実験とも呼べます。

アショカユは、「大学を、社会を変えるチェンジメーカーの孵卵器にするためには、まず大学内で影響力のある共鳴者を見つけ出し、アショカから有効なリソースを提供することによって、一大学の壁を超える、いわば『アカデミック・アントレプレナー』のネットワークを大学間で創ること。」という当時26歳のマリナ・キム(アショカスタッフ)の発想から生まれました。2008年、最初のチェンジメーカー・キャンパスとして、米国の名門大学4校(Johns Hopkins大学、Cornell大学、Maryland大学、George Mason大学)が認証されました。2016年12月現在、8カ国で37大学がアショカユ・

チェンジメーカーズキャンパスの認証を受けているほか、現在最終選定プロセスが進行中の14校には、北米の他、カナダや南米の大学が含まれています。

「チェンジメーカー・キャンパス」に認定された大学では、社会刷新のための情報源や学生が気づきを得るための自前のプログラムを用意することになっています。学内の社会起業コンテストや学部を超えたコースの設置や改善など、アプローチは自由です。他の認証校のプログラムをベストプラクティスとして参考にすることも奨励されています。これらの大学や大学院では、在籍期間だけではなく、生涯チェンジメーカーとして活動する場合は、出来る限りのサポートを提供することを誓約しています。2016年からネットワーク校の毎2年更新の仕組みが新たに加わりました。



ASHOKA U Exchange アショカユ・エクスチェンジ

アショカユへの申し込みの前に、社会起業や社会イノベーションについてあまり知識はないが、関心はあるという大学関係者や教育者に向けてデザインされたのが、「アショカユ3日間エクスチェンジサミット」です。このサミットは、「社会起業」や「社会イノベーション」についての概念論ではなく、社会を変える実践者としての超一流の社会起業家のTEDトークや、大学内の具体的なプログラムの紹介を内容とします。

大学生のチェンジメーカーたちの、自分が社会の矛盾を変えた体験紹介。採用基準に「変える能力」を取り入れた企業の参加などにより高等教育における最新の動向や刷新について知る機会を提供します。第1回は2013年米San Diego大学、第2回は2014年米Brown大学、第3回は2015年米Maryland大学、第4回は2016年米Tulane大学で開催されました。2017年3月には、米Miami Dade大学で第5回目の開催予定です。毎年20を超える国から600人余りの参加があります。アショカユおよびマリナ・キムに関する詳細は、日経BPオンライン記事でも紹介されています。

<http://business.nikkeibp.co.jp/article/report/20141217/275279/>



2016年2月米チュレーン大学で行われた第4回アショカユ・エクスチェンジには世界各国から660人が参加しました。

Ashoka Youth Venture アショカ・ユースベンチャー

社会の綻びに敏感に反応する若者(12歳～20歳)が、 想いを行動に移すための1年間の環境を提供します。

Youth Venture is a community of young people under 20 years old who are tackling societal issues they are bothered by with ideas that lead to real changes.

アショカ・ユースベンチャーは、2000年にアメリカで始まり、16カ国に広まりました。

日本では、2010年～2011年の実験プログラムを経て、2012年に本格始動しました。1年間に6回東京・関西・東北など全国で開催されるパネル審査会で、アイデアをパネリストの前で発表し審査をパスすると「ユースベンチャー（Youth Venturer）」として認定されます。特に関西と東北にパワフルなハブが生まれています。自由で刺激的なユースベンチャーのカルチャーは、若者たちからさらなる創造性を引き出し、2016年10月までに、76組/約300人の若いイノベーターが生まれています。

ユースベンチャーとして認定されると

- 日本全国に散らばるユースベンチャーのコミュニティのメンバーとして歓迎されます。
- 必要に応じて、上限10万円の活動資金が提供されます。
- 年2～3人来日するアショカ・コミュニティのイノベーター(フェロー・スピーカー・協働者)とユースベンチャーの集いの場を提供します。
- アショカ・ジャパンが主催するイベントに無料で参加することができます。
- 海外のユースベンチャーと交流するチャンスを提供します。
- 世界の最先端の社会イノベーションに関する情報を共有します。
- ASHOKA U ネットワークの米メイン州のアトランティック大学(College of the Atlantic)に留学する奨学金が同校から提供されます。
- 1年間の活動の後も、必要に応じてアショカジャパンのスタッフからアドバイザやメンタリングを受けることができます。

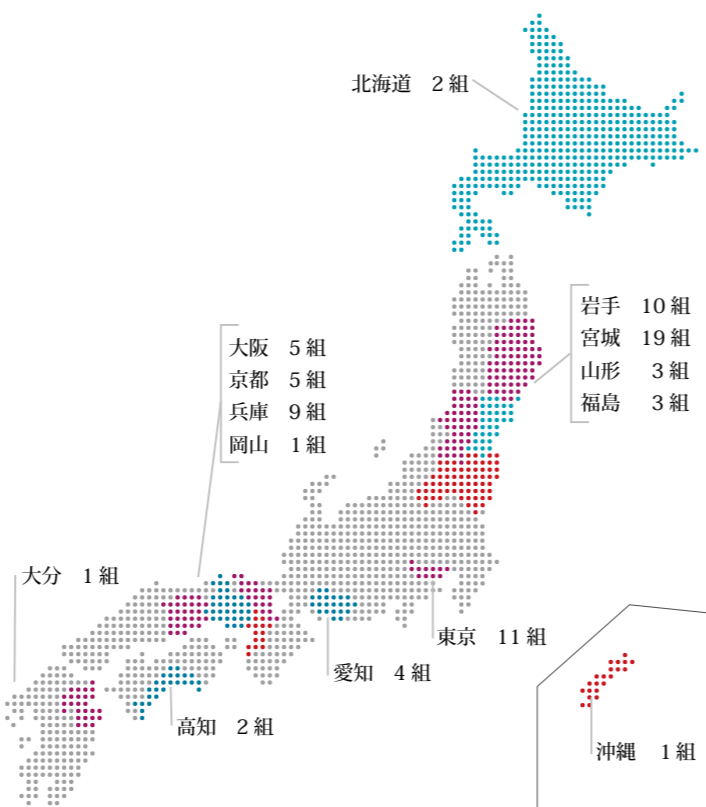
ウィーアーザチェンジ We are the Change (ユースベンチャー大集会)

アショカ・ジャパンが1年に2度開催する、ユースベンチャーの大集会 We are the Change は、2016年9月で7回目となりました。新たにユースベンチャーを認定するパネル審査会、すでに認定を受け活動をしているユースベンチャーの中間報告会、最終報告会、1年のユースベンチャーとしての活動を終えたOB・OGの活動報告会が行なわれ、一日で、ユースベンチャーとしての成長の歩み、ユースベンチャーの雰囲気や存分に味わうことができます。また、2015年度に選出されたアショカフェローである岩本美智彦氏にご登壇いただき、彼の取り組みを紹介いただきました。100名を超える参加があり、若者たちの熱い想いと覚悟に触れ、会場は熱気に包まれます。「若者の目の輝きがちがう」「もやもやした心さえオープンにできるほどここは安全な場だ」という声がよく聞かれます。

We are the Change のもう一つのハイライトは、ユースベンチャーや彼らに刺激を受けた若者が全国から集まる前夜、イベント当日の夜から翌日の午前中の時間です。ユースベンチャーたちが、どうすれば同世代の気持ちに火をつけられるかを夜を

2012年7月から2016年10月までに選出されたユースベンチャーは76組です。

76 teams were selected between July 2012 and October 2016.



徹して語り合います。

その熱い時間のなかで、自分の全てを見せて、仲間の全てを受け入れ、練り直す、そして新たな想いや見方が生まれます。ユースベンチャーたちは、この場を半年に一度帰る巣のような場と感じて、「半年で何ができたのか?、何ができなかったのか?」と自分を見直す機会となっています。

We are the Change は、自分自身が変わり、隣の人に影響を与え、その先にある社会、世界を変わっていく場です。



ユースベンチャーのその後 Former Youth Venturers NOW



2012年ユースベンチャー

山勢 拓弥
Takuya Yamase

※写真：バナナの皮で作るバッグは大きな収入をもたらしています。

カンボジアに渡りスラムに住む子どもたちの学校とバナナペーパー事業を立ち上げました。

Action is my message

ユースベンチャーになって、深く掘り下げて考えることと行動する意味を知りました。こうなりたい、こうしたいと語る人は多いが、それを行動に移せる人はなかなかいません。自分自身をつくるのは想いから発した行動の軌跡であると思います。カンボジアに来て、ゴミ山で活動している中で、教育水準の低さが貧困を招いていると感じました。子どもたちに学校に行かない理由を聞くと、「めんどくさいから」「勉強しても意味がないから」と

言います。子どもたちに教育を受けてほしいと思い、日本語学校を始めました。それと同時に、子どもたちに勉強することは意味のあることだということを行動で示しました。子どもたちを褒めて、褒めて、成長を見守ります。また、ゴミ山に通う人を減らしたいと思い、バナナペーパー事業を立ち上げました。現在5人のカンボジアスタッフと商品開発を進めています。そして近い将来、ゴミ山で働いている人たちの半数の雇用を生み出したいと考えています。



2013年ユースベンチャー

矢野 大地
Daichi Yano

フェローとの出会いがアショカから得られた最高の財産です。

Encounter with Ashoka Fellows

「社会を変革する行動を起こすには3つの壁を乗り越えなければならない。まず家族に理解してもらえない壁、次は友だちや周りの人から理解してもらえない壁、そして最後が社会全体に理解してもらえない壁。それを乗り越えなければ社会変革はありえない。」僕がユースベンチャーのネットワークの一員になって間もなく来日したアショカ・フェローのアンシュ・グプタの講演で聞いたこの言葉は、僕の胸に突き刺さりました。他のアショカ・フェローの起こしたグローバルな社会改革も、本当にシンプルなのに

数百万人の生活を変えるようなインパクトを出しています。僕の人生はユースベンチャーの経験で大きく変化しました。一番の変化は、自分自身を「シンプルな言葉で表現すること」ができるようになったことです。今までは複雑な言葉で壁をめぐらして社会から批判されないように隠れていたのですがそんな言葉を取っ払い、一番近い人からの批判にも打ち勝ち、自分が信じる道を突き進んでいるフェローの人たちを見て、未来の自分の姿を彼らに重ね、社会起業家として一歩を踏み出しました。



ユースベンチャープログラムリーダー
矢部 寛明

Hiroaki Yabe
Youth Venture Programmatic Leader

ケニアのチェンジメーカーカースクールにて(2014)

成長し続ける若者たち

Accelerating the expansion of young changemakers' network

東日本大震災が起きて、私は内定をもらっていません。ノーベル平和賞クラスのアショカオーストラリアの会社を辞退し、気仙沼に入りました。その唐突な行動は、頭で考えたというより「反応」でした。被災地に住み始めて見えてきたのは、高齢化をはじめとした地域の課題と、諦めることに慣れた子どもたちの自尊心の低さでした。「身の回りの課題に対し、自発的に動ける若者を始めました。その後、同じビジョンを描くアショカ・ジャパンと出会ってから5年が経過しました。以来、自分の頭で考え、自分の心で感じ行動する若者300人のネットワークが生

まれました。ノーベル平和賞クラスのアショカフェローとの対話やアショカの独自の環境により、さらに活動を加速していく彼らの姿を見てると未来はまだ大丈夫だという希望が湧いてきます。誰でも、不確実性の高い行動をする時は高いリスクがつきまといきます。ほとんどはそのリスクをとりたがりませんし、そっと蓋をしたいのが心情なのではないでしょうか?しかし「ガハハ」と笑いながら自らリスクをとって忠実に活動していくユースベンチャーたち。ユースベンチャーは僕にとって希望です。

NEWS

米メイン州アトランティック大学 College of the Atlantic (COA) への、日本のユースベンチャーの留学の途が開かれました!

College of the Atlantic offers scholarship to Ashoka Japan Youth Venturers

アトランティック大学 (COA) は、ASHOKA U ネットワークの37大学の1校です。2016年3月、COA 学長や学部長がウィーアーザチェンジ We are the Change に参加。日本のユースベンチャーたちの発表を目の前にして、「ぜひ、こういう若者に当校で学んで花開いて欲しい!」と年間1万ドル、最高4年間4万ドルの奨学金のオファーをいただきました。



Ashoka Youth Venture アショカ・ユースベンチャー

すべてのひとがチェンジメーカーである世界を築くための新たなチャレンジ

To realize our “Everyone-A-Changemaker” goal faster, our urgent task is to create an environment to nurture young changemakers—our future leaders.

2014年9月から2016年10月までに認定された33人のユースベンチャーから10人を紹介します。

Youth Venturers selected between September 2014 - April 2016



2014年春
橋本 陸 (17歳)
Riku Hashimoto

岩手県／大船渡東高校
Ofunato Higashi High School

助けられるはずの命を救いたい

To Save the Lives of Those Who Can be Saved

私のBystander（すぐ近くにいる）プロジェクトでは、一般市民向けの応急手当講習。地域イベントで救護活動を行っています。この活動を思いついたきっかけは、家族を急病で亡くした経験です。急性心筋梗塞で倒れた家族に、心肺蘇生法を実施しましたが、命を救うことはできませんでした。もっと早く気づけたら、と自分を責めていましたが、しばらくしてある目標を見つけました。「自分の力で助けられるはずの命を救う」。最近では、命の大切さを感じて欲しいという想いから、小学生向けの講習も実施しています。



2015年春
横山 玖未子 (20歳)
Kumiko Yokoyama

兵庫県／立命館大学
Ritsumeikan University

オシャレに減災防災を

From Lesson to Action

阪神淡路大震災の年に神戸で生まれ、その20年後に神戸で成人を迎えました。改めて大震災に向き合ったとき、たくさんの教訓があることに気づきました。しかし、それを行動に移している人は多くありません。どうしたらみんなが関心を持つんだろうと考え、神戸発オシャレな減災笛を作ろうと思いました。防災・減災を身近に感じてもらい、少しでも被害を小さくしたい。こうした願いを込めて友だちにプレゼントしたくなるような笛になるよう試行錯誤を重ね、2016年3月によりやく完成しました。



2015年秋
黒島 颯 (20歳)
Hayate Kuroshima

沖縄県／沖縄国際大学
Okinawa International Univeristy

子どもたちと、遊びの天才になる

Becoming a Genius of Fun Through Kids

僕は小学生のとき、横浜から沖縄へ引越ししましたが、なかなか沖縄のコミュニティに慣れませんでした。大学2年生の時東日本大震災が発生し、被災地から沖縄へ避難してきた小学生と出会いました。その子は僕と同様「沖縄で友だちができない」と言っていました。ところが、その子が、僕が開いたイベントに来て、「(今度は)友だちを連れてきていい？」とこっそり聞いてきました。僕にはできなかったことをこの子はできた！とうれしく、これを機にSmile with Childrenを設立しました。イベントでは大学生も子どもと一緒に遊び楽しんで、ハッピーになっています。



2014年秋
寺崎 幸季 (15歳)
Yuki Terasaki

岩手県／釜石高校
Kamaishi High School

仮設住宅を“家”と呼びたい

My “Home”

私は、東日本大震災以降、仮設住宅に住んで気づいたことは、住民の方たちは仮設住宅を“家”と呼ばず、“カセツ”と呼んでいることです。「あんな箱みたいなどころ、家なんて呼べない」どうしたら、“家”になるのか。それは、愛着を持てる建物にすることだと思い、鉄板の仮設住宅の壁に、きれいなマグネットを貼って、灰色の仮設住宅をカラフルにする「釜石マグネットぬりえプロジェクト」を2015年9月に開催しました。たくさんの方に参加していただき、カラフルな“家”ができました。



2015年春
吉浜 知輝 (16歳)
Tomoki Yoshihama

岩手県／宮古高校
Miyako High School

宮古の未来を高校生の力で

High Schoolers Changing the Future of Miyako

東日本大震災後、多くの方が宮古に来て、私たちを元気にしてくれました。地元の高校生である自分たちができないことはないかと考え、子どもからお年寄りまで楽しめるイベントを企画し、2015年4月「SYM」という高校生団体を立ち上げました。高校生が街のために活動することを通じて、地元愛が生まれ、宮古をつまらない、と言っている高校生たちの意識を少しでも変えたい。2016年2月、30名以上の高校生を巻き込みイベントを開催。参加した人全員が楽しみイベントは無事終わりました！



2015年秋
船橋 理仁 (17歳)
Rihito Funabashi

愛知県／菊里高校
Kikuzato High School

自ら学んでいく社会を目指して

New Education Through the Eyes of Students

これまでの日本の学校教育は、先生が生徒へ一方的に知識を教える形態がほとんどです。生徒はテストで点数をとるために勉強する受動的な状態。どうすればもっと楽しく、自ら学べるだろう。そこで思いついたのが「高校生教室」です。月に1～2回、高校生が教師となり、高校生に対して授業をします。教える側、学ぶ側が同じ立場であることで親近感がわき、学ぶ楽しさや教えることの意義を分かち合っています。さらには「なぜ自分たちは学ぶのか」といったテーマを話し合うなど、高校生が教育を考える機会を生み出しています。



2016年春
山崎 紀奈里 (17歳)
Kinari Yamasaki

岡山県／岡山一宮高校
Okayama Ichinomiya High School

日生を元気に

Reinvigorate Hinase Town

瀬戸内海に面した港町、岡山県日生（ひなせ）地区で幼少期を過ごし、この町の人たちに育てられました。ここ日生地区でも少子高齢化が進み、元気を失っています。大好きな日生のために、地区の人と町を元気にしたい。そこで目をつけたのが、甘藷を肥料としてつくられた日生の野菜「あま（vege）」です。これを中高生たちが育て、加工方法について婦人会の方たちと考えています。私の夢は、あま（vege）を日生に根付かせ、祭りが大好きな日生の人たちと、「あま（vege）祭り」を開くことです。



2016年秋
木村 元哉 (20歳)
Motoya Kimura

福島県／福島大学 Fukushima University

湯澤 魁 (20歳)
Kai Yuzawa

東京都／明治大学 Meiji University

福島で起きた事故を学び、考え、議論し、発信する！ Students to learn, think, discuss and express about TEPCO Fukushima Nuclear Plant Explosion.

福島では、これから避けては通れない「廃炉」という複雑な問題があります。事故から5年が経つ現在でもブラックボックス化している福島第一原子力発電所何が起きたかを客観的に学び、福島県内県外の大学生と一緒に考える機会をつくりたいと考えました。学生が、東京電力福島第一原発事故により被災した福島の復興の現場を巡ってから、他の学生と共有・議論し、発信する場づくりに取り組んでいます。

賛同者の声



文部科学大臣補佐官

鈴木 寛氏

Kan Suzuki

Special Advisor to the Minister of Education, Culture, Sports, Science and Technology(MEXT), JAPAN

ここには本物がある！

2015年9月ユースベンチャー大集会 We are the Change のパネリストを経験して（スピーチから抜粋）

アショカ・ジャパンのコミュニティに君たちがつながっていることは、幸運であることを知って欲しい。アショカはさすがだと思うのは、妥協を許さない本物だからです。ソーシャル・イノベーションやソーシャル・アントレプレナーシップが日本で生まれて20年近く経ち、その進化の過程で私はいろいろな形で関わってきました。「社会をより良く変える」という初心から離れて、偽物が多くなってきている現実には本当に残念です。

つまり、ビジネスモデルだとか、アイデアだとか、プレゼンの善し悪しとかの「形」にとらわれ、ソーシャル・アントレプレナーシップのバックボーンである「心の深さと真摯さ」が忘れられています。世界を根底から変えていくのは、ビジネスモデルでもアイデアでも



2016年春
八重樫 美里 (17歳)
Misato Yaegashi

岩手県／盛岡中央高校
Morioka Chuo High School

皆が先生で皆が生徒！

Everyone is a teacher and a student!

子供の頃からずっとダンスを習っていました。でも高校に入った年に高校生が通えるダンス教室が岩手にはないことを知りました。それからは東京に週一回ダンスレッスンに通い始めましたが、こんな贅沢は誰もができるわけではありません。それで、私は東京で習ったダンスを岩手で友達に教えることを始めました。また、ピアノの上手なクラスメートとダンスと交換で教えあうことを始めました。それぞれが得意なことを教えあうプログラムのスキームは、こうやって生まれました。



2016年秋
ミシュラ 桃雛 (17歳)
Tuhina Mishra

東京都／アメリカンスクールインジャパン
American School in Japan

サモサを販売してインドの恵まれない子供たちの学費を生み出す！

Fundraising for the unlucky children in India to go to school through the sale of samosa in Japan..

インドは父の出身国でもあり私にとっては第二の故郷です。インドでは、行きたくても学校に行けない貧しい子供たちがたくさんいます。私はすべての子どもたちは平等に学ぶ権利があると信じています。ですから、私はサモサという美味しいインドの食べ物日本のクラスメートたちと料理し販売し、その売り上げをインドの学校に行けない子供達の学費に当てる取り組みを立ち上げ、これまでに8人の学費を捻出しました。プログラムを拡大して100人の子どもたちを学校に行かせることが目標です。

なく「人間」に他なりません。

社会を良くするのは、一人ひとりが対話を通じて、思いを共有し、一緒に汗を流し、涙を流し、何かを生み出すこと。何かを達成するには、山あり谷あり、谷あり泥沼あり。そこを「どうやって」乗り越えるかが、その人間を語るのです。

このプロセスをアショカは非常に大切にしています。だから、「本物」だと、私は敢えて表現したのです。すばらしいコミュニティがここに存在していることは、日本と世界と宇宙にとってありがたいことだと私は（今日のパネリストとしての経験を通じて）思います。ユースベンチャーの若者たちが、日本に、本物の価値観が貫く未来を創りあげるだろうと、私は信じています。

Walls No More • Co-Creation

ウォールズ・ノーモア | コウクリエーション (共創)

行政、企業、市民の3つのセクターの壁を壊し、同じ目標に向かう「共創 Co-Creation」が世界を大きく変革します。

Co-Creation: Business, Government and Citizen sectors team up for the fundamental solution of imminent issues we face.

世界中で環境破壊、気候変動による影響は深刻であり、ヘルスシステムは過剰負担に悩み、現在でも世界で9人に1人が飢餓に苦しんでいます。私たちは、この状況を改善する有効な手立てが今なお見つからないことに焦りを感じています。

企業の社会的責任という通念は19世紀から存在していますが、近代では1960年代から企業の環境への責任(CSR)が盛んに問われるようになりました。とりわけ、グローバルな経済活動が展開され始めた1990年頃は、

より注目を集めるようになりました。しかし、これまでの企業で定着した課外活動的なCSRモデルは「美しく心温まる善行」の域を出ず、世界が直面している喫緊の問題の解決には程遠いという声が高まっています。一企業、一政府、一市民組織が、単独で手をつけるには、残念ながら問題は余りに膨大かつ深刻であり、セクター間の壁を壊し「共創」することが答えではないかという意識が浸透し始めています。

アショカとドイツの大手製薬企業ベリンガーインゲルハイム社 (BI)

Co-Creation of ASHOKA and Boehringer Ingelheim pharmaceutical company

ドイツの大手製薬企業 Boehringer Ingelheim (BI) 社は、2010年創業125周年を機に、同社のリーダーの間でこれからの目指す方向について議論が交わされ「BI社にはない見識と経験を持つCSO(市民組織)と組むことで、次の100年の方向づけが出来るのではないか」という結論に至りました。

創業以来「社会への還元」という信条を貫き、「刷新なくして価値はなし」という鮮明なビジョンを持つBI社とアショカとのマッチメイキングを導いたのは、仏パリにあるコンサルティング会社です。

BI社がアショカという極めてユニークな市民組織とのパートナーシップに踏み切ったのは、2つの理由がありました。一つは両者が共通の価値観を持っていること。もう一つは、「最貧困層を顧客の対象から外す」これまでの製薬会社のやり方は、もはや通用しないことが明らかだということです。最貧困層のニーズをどうやって知り、施しではなく顧客として最貧困層をマーケットに取り込むためには、どのようなアプローチをしたら良いのか?この答えに行きつくヒントを探していたBI社は、世界90カ国でそれぞれの社会に深く入り込み変革を実現しているアショカのネットワークにその糸口があると見たのです。

2010年からの「まるで暗闇のなかを手探りで歩く」ような実験の期間を経て、BI社は、2011年US1300万ドルを投じ、アショカとの3年間パートナーシップ契約を結びました。

「社会を大きく変革するインパクトを出す」、「BI社の事業の発展(長期的利益)を促す」ことを成し遂げるという2つのゴールを目指すパートナーシップとはどのようなものなのか?

変革は「プロジェクト」ではなく息の長い長距離マラソンなのです。いくつもの実験と失敗の繰り返しのプロセスにおいて、文化や課題へのアプローチが全く異なる両者がお互いを理解し合うことが共創の第一歩でした。BI社に限らず企業側には、社会起業の真髄である「不確実で予測不可能、かつ曖昧なプロセス」に慣れることの努力が求められます。また、アショカに限らず社会起業側も「リスクをとることをよしとせず、硬直しがちな」企業の体質に痺れを切らさず忍耐強くつきあう努力をしなくてはなりません。

最終的に、両社の歩みにより、3年間に健康/保健の分野のフェロー50人を発掘。BI社の決定権のあるポジションにある社員がアショカ・フェローの活動に半年間スタッフとしてフルタイムで関わるなど、いくつかの具体的な成果が生まれています。2014年には、この共創プログラムをさらに推し進めるため第2回目の契約が締結されました。

「企業が世界を変える」キャンペーンを日本でスタート!

Ashoka Japan started a campaign to advocate co-creation of social entrepreneurs and corporations.

アショカ・ジャパンは、2015年7月、日本のオーディエンスに世界各国の最先端の企業チェンジメーカーについて紹介すべく、「企業が世界を変える」キャンペーンをスタートしました。

2015年7月2日には、ラックス、ダヴ、リプトンなどのブランドを約190カ国で展開する世界最大級の消費財メーカーであるユニリーバ社が2010年に立ち上げた「ユニリーバ・サステナブル・リビング・プラン」(Unilever Sustainable Living Plan)の紹介を同社日本支社長のグアルネリ氏にいただきました。同プランでは、2020年までに「少なくとも10億人の暮らしを向上させ」、「環境負荷を半減し」、しかも「売り上げを倍増する」という3つの大きな目標を掲げています。売上成長とサステナビリティの両立をめざす同社の成長戦略は、21世紀のビジネスモデルとして世界中から注目を集めています。

2015年12月、市町村の刷新に対する新たな解決方法を生んだサシャ・ハゼルマイヤー氏(2011年選出アショカ・フェロー)が講演をしました。ハゼルマイヤー氏が生み出した「シティマート Citymart)」は、世界中の社会課題に対する解決法を世界中の社会起業家や中小企業が、入札する仕組みであり、最先端のイノベーションとして注目されています。(P?参照) また、2016年4月には、2013年選出のフェロー川添高志氏の運営するケアプロの、小田急電鉄とセブン&Iホールディングスとのコラボレーションについての紹介するイベントが東京で開催されました。

写真右上:ユニリーバ社は、本業を通して「売り上げ」と「社会変革」の二兎を追う。日本支社のグアルネリ社長が大企業としては前代未聞の戦略を紹介しました。

写真右下:ケアプロと協働する小田急電鉄の三宅氏とセブン&Iホールディングスの尾崎氏が川崎市長のファシリテートで、大企業と社会起業家とのコラボレーションについて議論しました。

写真下:2月10日、政策大学院大学で行われたハゼルマイヤーの講演第二部は、コミュニティーデザインのバイオニア山崎亮氏をゲストに迎えました。



History of ASHOKA Innovators for the Public

アショカの歴史

世界の変化に伴いアショカも進化してきました。

1970's

The Seed

アショカ流社会問題解決へのアプローチ
「システミック・チェンジ」の誕生

社会にある数多な問題を根本的な解決に導くのは、応急措置ではなく、それらの綻びを生み出している仕組みそのものの変革、つまり「システミック・チェンジ (systemic change)」であるという発想がビル・ドレイトンによって生み出された。

彼は、ソーシャルワーク（社会福祉）とアントレプレナシップ（ビジネス起業）を、組み合わせた新しい概念と呼称「ソーシャル・アントレプレナシップ (social entrepreneurship)」「ソーシャル・アントレプレナー (social entrepreneur)」を創造した。そして、システミック・チェンジのアイデアを生み、実行し、継続させる能力を備えたシステミック・チェンジメーカー（ソーシャル・アントレプレナー）を発掘し、彼または彼女の取り組みが加速するシステムができないかと考えるようになった。

1980's

The Beginning

社会を変える人の発掘をスタート

70年代からドレイトンが抱いていた構想を具現化する活動母体として ASHOKA Innovators for the Public を非営利組織として 1980 年、米ワシントン DC に発足。

1980 年 インドで新しい学習法（Environmental Studies (EVS)）を考案し、広めようとしていたグロリア・デソーザを見つけ、アショカの規定するシステミック・チェンジメーカーの基準に沿うと判断し、アショカ・フェロー第一号として認定。デソーザが活動に専念できるよう、3 年間の生活費を支給。EVS はこの間にインドの 1700 校に導入され、その後、全小学校に普及。この時の「3 年間の生活費支給」が、フェロー支援のモデルとして定着し、その後インドネシア、ブラジルとネットワークが拡大していく。

1990's

Replication

個人が社会変革の担い手になるという認識が浸透しはじめ、模倣が始まる

アショカが「社会起業 (social entrepreneurship)」という分野を確立し、明瞭で厳格な基準から選出した社会起業家の出現が、アメリカ社会の一部知識層の間で知られるようになる。90 年代中頃から、アショカに類似した取り組みが、アメリカ、西ヨーロッパ、南米で始まる。

2000's

Paradigm Shift

システミック・チェンジが社会問題の解決を促すという理解が浸透する時代

従来の発想を拡大し、すべての人を巻き込むより大きなゴールとして「Everyone-A Changemaker」を打ち出す。「性別、貧富や教育の格差、障害などを越えて、矛盾を感じたら自分から変えるという自信とスキルを誰もが持つ社会を創り出す」方法の模索を始める。

・2000 年 先進国では始めて、米国で発掘の活動が始まる。

・2006 年 西ヨーロッパ初の拠点をドイツに設置。（2016 年時点でフランス、イギリスなど欧州 15 カ国に拡大）

・2009 年「21 世紀の大学は社会をより良くする人材を育てる環境である」というビジョンに共鳴する大学を発掘して「アショカユース・チェンジメーカー・キャンパス (Ashoka U Changemaker Campus)」として認証。グローバルなネットワークの構築を始める。（2016 年時点で 8 カ国 37 大学がネットワークにある）。日本では、ゼロからアショカユース・チェンジメーカー・キャンパスを創り上げる試みが、2016 年夏スタートした。（P.12 参照）

2010's

Expansion

21 世紀に輝く組織の構造や小中高校教育の模索を始める

「チームオブチームズ」(Team of teams = 志と能力を併せ持つイノベーターが「チーム」を組み、そのチームが他の同様にパワフルなチームと、さらに大きなチームを形成することによって、1 チームでできるよりもっと影響力のある大きな変革を起こす) という考えと、「流動性」(Fluidity = 硬直したハイアラキー構造と正反対の組織の人間関係の在り方) が、20 世紀型組織の元凶でもある「ヒエラルキーと疎外」にとって代わる社会のフレームワークとなるという考えを打ち出す。

・2009 年前後「あらゆる社会の変革の源はエンパシー (Empathy) である」という気づきが、創設者ドレイトンを中心とするアショカのリーダーの間で認識され、チェンジメーカー・スキルに加えて、エンパシーを幼少期からの教育に入れ込むための「チェンジメーカースクール (Changemaker School)」ネットワーク作りがスタート。（2016 年 1 月時点で 28 カ国 198 校を認証）

・2011 年 東アジア圏で最初の拠点としてアショカ・ジャパン発足。

・2013 年 アショカ・コリア及びアショカ・ギリシャ発足。

・2014 年 アショカ・イタリア発足。

・2016 年 アショカ・ポルトガル発足。

1 月時点で 38 カ国に拠点を置き、フェローは 89 カ国約 3300 人。スタッフ数は 38 カ国に 408 人。

Message from Bill Drayton

“ The new reality requires a profoundly new type of leadership.

And, it requires everyone to be a practicing changemaker.

There will quickly be no role for anyone without these sophisticated skills.

Ensuring that every young person has his/her power and can contribute is the job of all of us.”

ターニングポイントを見逃すな！

Seizing the Change Turning Point

歴史的な転換期、即ちターニングポイントは突然やってきて私たちを慌てさせる。大きなターニングポイントであれば尚更のことだ。今ここに訪れているターニングポイントを見逃してしまえば、取り返しのつかない過ちとなる。私たちはそのことを肝に銘じるべきだ。

まず背景となる歴史的事実を紹介しよう。

紀元前ローマ帝国後期から西暦 1700 年頃までの数千年間に、西洋では人口一人当たりの収入は不動だった。しかし、その間に小さな変化が積もり 1700 年前後に転換期を迎えた。商いのセクターで、模倣や競争が始まったのだ。そして、1700 年から一人当たりの収入は雪だるま式な速度で増えていく。（紀元前ローマから 1700 年頃までの数千年間は）専門職や組み立て工場などで、同じ作業を効率的に繰り返すことが社会を維持する術であった。この時代には、若い時に（銀行員であれ、理髪師であれ）特定のスキルを仕込まれ、それぞれの専門組織の壁で囲まれた箱の中で、その能力をさらに磨き上げることが唯一の生き方だった。しかし、1700 年以降は、「繰り返し作業」のニーズは、加速度的に急減して、今に至っている。では、2017 年の現実とは？ ひとつの変化が、さらに多くの変化をもたらし、それらの変化がさざ波のように無数の小さな変化を引き起こす新しい時代には、組織の在り方も当然変わる。硬直した組織構造や壁は、もはや有効ではなくなるだろう。人と人、組織と組織の間は、壁を崩してオープンに流動し、有能な個人が集まってチームを組み、そのチームがさらに他のチームと手を繋ぐことによって出来た大きなチームが、社会の基本となって行くだろう。既存のヒエラルキーとは対極の、新しい繋がり方、新しいフレームワークが基準となる社会。こんな新しい時代への転換期が すぐそこまで来ている。

新しい社会構造では、リーダーシップの在り方も全く異なってくるだろう。明らかなのは、チェンジメーカーのスキルがリーダーの必須の資格となるということだ。チェンジメーカーは極めて複雑で高度なスキルだが、そのスキルを持たないものは取り残されていく。それだけは、はっきりしている。

ここまでの話をご理解いただけたなら、これから私の言わんとすることの意味はすぐにわかっているはずだ。つまり、「まだ 10 代のうちにチェンジメーカーのスキルを磨く練習を始めなくてはならない」、ということだ。子どもたちだけでなく、保護者や、国にもこの緊急性をご理解いただきたい。夢、即ち自分の成し遂げたいゴールに向けて、それを実現するためにチームを組み、学校や国を、世界を、より良くするために変えていく、という極めて高度で複雑な能力を速やかに育まなければならない。チェンジメーカーを自分自身の力で経験した若者には、人生を怖がらずに生き抜く「力」が備わる。社会に真の意味で貢献するという最もパワフルな力は、彼らに生きる自信を与える。

世界の秀逸なアントレプレナーたちをご存知だろう。では、彼らのほとんどが、10 代のうちに何か新しいプロジェクトを興す経験をしているということはご存知だろうか？ アショカ・フェローに限れば、その 8 割余りが 10 代で何かを自力で興した経験を持つ。LinkedIn に登録した 4 億 2500 万のうち、10 代で何かを始めた人たちは、何も始めなかったグループの 4 倍も C レベル (CEO,CFO,COO など) の企業重役になっている。さらに創業者、共同創業者の割合は 5 倍にもなるという。チェンジメーカーが少ない社会には、数多くのチェンジメーカーが存在する社会のような競争力はないということを雄弁に証明するデータだ。

今、この歴史的ともいえる大きなターニングポイントに生きる私たちに最も重要な仕事は、若者一人ひとりの「チェンジメーカー」の能力を育むことに他ならないのだ。

ASHOKA 創設・CEO

ビル・ドレイトン

Bill Drayton

Founder and CEO of Ashoka



NEWS ニュース

アショカは世界の非営利組織のうちベスト5の評価を得ました。

※非営利組織の評価団体として最も権威がある NGO Advisor(スイス・ジュネーブ) が2017年1月に発表した調査による。

www.ngoadvisor.net

1 BRAC ブラク	2 MEDECINS SANS FRONTIERS 国境なき医師団	3 SKOLL FOUNDATION スコール財団	4 DANISH REFUGEE COUNCIL デニッシュ・ レフュジー・カウンシル	5 ASHOKA アショカ
6 MERCY CORPS マーシーコー	7 OXFAM オックスファム	8 HANDICAP INTERNATIONAL ハンディキャップ・ インターナショナル	9 LANDESA ランデサ	10 ACUMEN アキュメン
11 SAVE THE CHILDREN セーブ・ザ・チルドレン	12 CURE VIOLENCE キュア・バイオレンス	13 BAREFOOT COLLEGE ベアフット・カレッジ	14 ROOM TO READ ルーム・トゥ・リード	15 APOPO アポポ
16 ONE ACRE FUND ワンエーカーファンド	17 GRAMEEN FOUNDATION グラミン財団	18 CERES セレス	19 SAUDE CRIANCA サウデ・クリアンサ	20 ISLAMIC RELIEF イスラミック・リリーフ

Join ASHOKA JAPAN! 参加方法

Membership

メンバーシップを通して

会員制グローバルサポート
グループに参加しませんか？

Ashoka Friends East Asia
アショカ・フレンズ

2015年4月発足した、アショカの活動を
支える日本発のネットワーク。会員に
は、アショカ・ジャパンおよびグロー
バルの活動の進捗状況の共有や、アショカ・
フェローや海外スタッフとの交流の場が
提供されます。2016年時点で日本のメン
バー13名、韓国のメンバー3名。

Ashoka Support Network

アショカ・サポートネットワーク

2008年、当時コンサルティング会社
マッキンゼー・フランスの代表であった
オリヴィエ・カイザー氏がアショカのビ
ジョンに共鳴し、その活動を促進する手
段として立ち上げました。2016年4月
時点でメンバーは合計350人。フラン
ス、ドイツ、英国を中心に西ヨーロッパ
で活発に活動が行われています。

Staff, Intern, Volunteer

スタッフ、インターン、ボランティア
として

あなたの経験、技能、知識を活かし
ながら加わりませんか？

次のような方を求めています。

- 規模の大小にかかわらず、公益のため
の活動を自分で立ち上げ継続させた経
験がある。
- 想像力と創造力に富んでいる。
- 現在の社会のあり方に疑問を持っており
「こう変えたい」という想いと意志
を持っている。
- あふれ出るエネルギーと自分が変えら
れるという自信がある。
- 他の人の気持ちを配慮するエンパシー
を備え、誠実で真摯な人柄である。
- 常時、各国のスタッフとコミュニケー
ションをとるための英語力がある。

アショカ・ジャパンでは随時スタッフ、
インターン、ボランティアを募集しています。
詳細は、ウェブサイトをご覧ください。
Japan.ashoka.org

Nomination

ノミネーターとして

100万人に1人の
システム・チェンジメーカーを
一緒に探しませんか？

社会の膿を生んでいる根本的な構造を変
革する「システム・チェンジメ
ーカー」の発掘にご協力ください！
アショカ・フェローの候補者は皆さんの
ごく身近にいるかもしれません。社会の
綻びを見ぬふりをしたり、解決を他人任
せにするのではなく、地道にコツコツと
変革に取り組んでいる人に気がついたら、
その人のしていることは将来大きな
変革に繋がるかもしれないのです。
そんな方をご存知だったら、是非ご推薦
ください。
また、ご自分のしていることが、アショカ・
フェローとしての基準に適しているかも
知れないと思う方も、是非ご応募くださ
い。(アショカ・フェローの選考基準に
ついては、本カタログ6ページをご参照
ください。)

Ashoka Japan empowered by

MIZUHO

L'OCCITANE
EN PROVENCE

JAPAN
SOCIETY

ANA Inspiration of JAPAN
A STAR ALLIANCE MEMBER

BLUE WING

The Ezra
Memorial
Foundation

LATHAM &
WATKINS LLP

BEN & JERRY'S

ASHOKA globally empowered by

ASHOKA globally empowered by
Accenture
American Express
American India Foundation
Ann Lennartz
Argidius Foundation
AVINA
Barclays PLC
Best Buy Children's Foundation
Bill and Melinda Gates Foundation
Boehringer Ingelheim
C&A Foundation
Cartier Charitable Foundation
Daniele Agostino Derossi Foundation
Danone Ecosysteme
David & Lucile Packard Foundation
David and Phyllis Oxman Family
eBay Foundation
Einhorn Family Charitable Trust
EngenderHealth
FEMSA
Flora Family Foundation
Fundacion Aqueae
Fundacion Un Sol Mon
GE Foundation
Geopost group
Goldman Sachs Foundation
Google
Hystra
Hyundai Department Store
Hyundai Marine & Fire Insurance
IKEA Foundation
Intel Corporation
Jack Forrest and Debbie Pate Family
Jenesis Group
John & Judy Harding Family
Jurzykowski Family
KAKAO, Inc.
Lam and Anh Nguyen-Phuong Family
Latham & Watkins LLP (SF)
Latham & Watkins LLP (NY)
Lemelson Foundation
Martin und Gerda Essl Sozialpreis
gemeinnützige Privatstiftung
Mashhoon Family Foundation
McKinsey & Company (Frankfurt)
McKinsey & Company (Sao Paulo)
Microsoft
Moxie Foundation
MTV VIACOM Networks Latin America
National Geographic
Nike Inc.
Omidyar Network
Porticus
Potencia Ventures
Puig Beauty & Fashion
Rede Globo de Televisao
Robert Bosch Stiftung GmbH
Robert Wood Johnson Foundation
Rockefeller Foundation
SAP SE
Schneider Electric
Sentient Foundation
Sergey Brin and Anne Wojcicki
Siemens Stiftung SbR
Skoll Foundation
Societe Generale Corporate & Investment
Banking
Staples Foundation For Learning, Inc.
Swiss Re
The Arthur Guinness Fund
The Atlantic Philanthropies
The Craig and Susan McCaw Foundation
The Ford Foundation
The Gatsby Charitable Foundation
The Hilti Foundation
The John D. and Catherine T. MacArthur
Foundation
The John S. and James L. Knight Foundation
The Lego Foundation
The MasterCard Foundation
UBS AG
Ursula Zindel-Hilti-Stiftung
W. K. Kellogg Foundation
Weil, Gotshal & Manges LLP
Woodcock Foundation

Ashoka Friends Members and
Advisors 2015-2016

Aiko Austin (Emeritus)
Atsumi Arima
Chris LaFleur
Eiji Harada
Junko Katayanagi
Kenji Hayashi
Kohei Nishikawa
Masue Katayama
Mika Kumahira
Osamu Yamamoto
Rika Beppu
Yoshie Yokoo
Hiromi Nagao

YV Panelists 9/2014 - 10/2016

Akira Hayakawa
Akira Takeno
Atsuko Tonozuka
Eiju Hangai
Hideyuki Sasaki
Hiroko Hamada
Hiromi Nagao
Hiroshi Sato
Ibuki Ozawa
Kan Suzuki
Kei Nakano
Ken Hill
Kiyoto Matsuda
Kohei Nishikawa
Koichi Kimoto
Kyoza Kurisu
Masaki Takao
Megumi Ishimoto
Naoko Hitachi
Nobuaki Sasaki
Noriyoshi Minowa
Rieko Ueda
Satoshi Ito
Seiichi Onodera
Shinichi Chiba
Shintaro Saito
Tadashi Kawai
Takashi Ui
Takehiro Oikawa
Takumi Ohori
Takayuki Furuyama
Yosuke Ainai
Tatsushi Shimomura
Yuuki Kawahara
Yumiko Nunotani
Yuta Kanno

Other Contributors

Akemi Miyabara
Akira Hayakawa
Akira Hombro
Chikara Ushiki
Daniel Senger
Eri Ozeki
Enne Matsushita
Etsuo Okamoto
Hiroaki Sato
Hiroaki Umehara
Ichiro Kawashima
Keiko Kiyama
Ken Ito
Kenji Hayashi
Koichi Kimoto
Mami Mita
Masahiko Sato
Masaki Takao
Masaki Takizawa
Nobuko Tsutsui
Ryuji Nakatake
Ryo Yamazaki
Taeko Arakawa
Taisuke Ozeki
Takumi Irie
Toshie Fujino
Yukako Kajiwara
Yuko Taniguchi



staff | intern | 2014-2016

Nao Kato | Yuki Oda | Miki Nagashima
Nanami Nakagawa | Mana Shibata
Nahomi Tsuboi | Hiroaki Yabe |
Nana Watanabe

一般社団法人アショカ・ジャパン

〒150-0012
東京都渋谷区広尾1-11-2
AIOS 広尾ビル 407
TEL/FAX 03-6459-3144
E-mail japan@ashoka.org
URL japan.ashoka.org
設立 2011年1月

会員費・寄附などの詳細については、japan@ashoka.org までご連絡ください

